

乳首をめぐる表現論

東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻

学籍番号 3225355

岡田一那／Kazuna Okada

乳首をめぐる表現論

A Study of the Representation of the Nipple

要旨：

本論文では、線・面・立体における乳首表現を横断的に捉え、それが単なる身体の一部ではなく、時代や文化、ジャンルによって意味づけられる存在であることを考察した。線表現においては、乳首はキャラクター性と結びつき印象を形づくる要素となり、描かれるか否かは読者の視線をどこに向けるかと関わっている。面表現のうち西洋絵画では乳首は理想化された人体の一部として描かれ、日本の浮世絵では日常の中の出来事として描かれながらエロスを表すものとして存在した。さらに立体表現では文化差も見られ、乳首は現実とフィクション、身体と物語のあいだをつなぐ存在であるといえることがわかった。

1. 序論

2025年度は人生の中で一番、乳首を描いた年だったように思う。課題作品から落書きまで、とにかく狂ったように乳首を描いていった。乳首を描き始めたきっかけは、卒業制作で自身が制作したアニメーションのキャラクターの乳首を描いたところからだ。当時描いたキャラクターは、大きなおっぱいが顔のようで、その上に乗っている乳首は目の機能を持ち合わせていた。今年度は、狂ったように乳首を描きながら、新しい乳首のフォルムの形成も行った。そんな中、11月末から上映が始まった映画『チェンソーマン レゼ編』を見にいったのだが、鑑賞中劇中のワンシーンでデンジとレゼの乳首が描かれていない箇所を発見した。なぜ乳首が描かれないのかという疑問から、そういえば他の表現媒体では、乳首はどのように描かれているのかという疑問が本論文を書くに至った経緯である。

したがって本論文では、線・面・立体という三つの表現領域に着目し、それぞれにおいて乳首がどのように表現されているのかを考察していく。

その前に、当たり前ではあるかもしれないが今一度、乳首の範囲について記しておこうと思う。というのも、私自身、乳首について調べているうちに、「あれ？乳首って突起部分だけだったろうか？乳輪も含まれているのだったろうか？そもそも乳首ってどこからどこまでが乳首なのだっけ？」と、ハテナだらけになってしまったので、自身の混乱を避けるためにも明記しておきたい。人体解剖生理学によると乳首は哺乳類の胸部にある小さな突起状の器官であり、その周りの色素沈着した領域を乳輪と呼ぶらしい^{※1}。

解剖学的にみると乳首と乳輪は分けて考えられるが、ここはあえて、本論文で扱う乳首は乳輪が描かれている場合は、それも含めて乳首とすることにする。

2. 乳首の線的表現

本章では主に日本の漫画表現の中での乳首の描かれ方について焦点を当てて考察する。

2-1. 乳首表現の変遷（70～80年代）

漫画の乳首表現を語る上で通らざるを得ないのがエロ漫画である。

なんといっても乳首の宝庫だからだ。今回は「エロ漫画表現史」^{※2}（以降、表現史と略す）

という本を元に乳首表現の変遷を辿っていく。

表現史によると、エロ漫画は 1973 年頃、劇画スタイルの漫画に、セックスおよびパイオレンス描写を強めた「エロ劇画」というジャンルが確立された。その後、徐々にジャンルが増えてゆき 80 年代に入ると、漫画本来のデフォルメされたキャラクターに、アニメチックで可愛い美少女というモチーフを融合させた「美少女コミック」という新たなジャンルが生まれたという。

この時点で、リアル描写のおっぱい（図 1、2、3）とデフォルメ描写のおっぱい（図 4、5、6、7）の二種類あることがわかる。ということは、乳首も 2 種類あることになるだろう。見比べてみると、その違いがよくわかる。エロ劇画の方は、おっぱいの丸みに沿って乳輪に影が落ちている。そして乳輪をひと線で囲うような表現ではなく、トーンや細かい斜線によって丁寧に描かれている。乳頭をあえて描写しないことで、より突起部分が強調されている。この辺りはデッサンの応用のようなものである（光が強く当たる部分を白抜きすることでより手前が浮き出て、立体感が出る）。

美少女コミックの方は、デフォルメ化されているため、少ない線数で乳首を表現している。エロ劇画の（もちろん作家によって多少絵柄の違いはあれど）乳首の描かれ方はどれも似ているが、美少女コミックでは、作家によって乳首の描かれ方が異なっているのがより顕著である。図 4 の乳首は、乳輪は描かず突起部分だけ小さなくの字（U の字や C の字のようにも見える）で表現されている（このくの字表現は他の作家にもよく見られる）。図 5 は、乳輪と乳首をまとめてベタ塗りで描かれている。図 6 では、乳首と乳輪が二重丸のように描かれており、図 4、5 と比べると比較的具体的な描写である。点のみで乳首を表現している図 7 は究極のデフォルメ化と言えるだろう。80 年代は基本的にこの 4 種類が基本になっているようだ。80 年代初期から中期までのおっぱいについて著者は、形や動きなどのこだわりはまだそれほど細分化されていないと述べている。乳首もそれに比例するように、主に上記の 4 種類が主流で、あとはその応用といった感じの印象を受けた。

中期から後期に入るとおっぱいは「巨乳化」し始める。乳首も巨乳化に伴って、サイズの大きいものが登場しだした。（図 8、9）

こう見ると、年代を重ねていくごとにおっぱいの表現が変化するとともに、乳首もまた変化していったのが分かる。



図 1

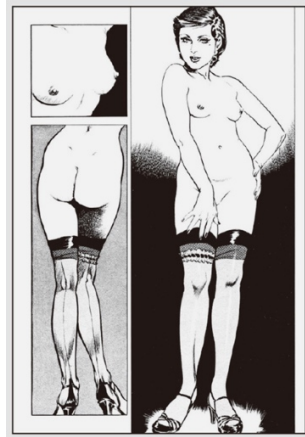


図 2



図 3



図 4



図 5



図 6



図 7



図 8



図 9

2-2. 乳首はおっぱいの顔

90年代以降のおっぱいについて、表現史の中で稀見は以下のように述べている。

九〇年代始め、中期あたりに登場する、うたたねひろゆき、田沼雄一郎…、新貝田鉄也郎…、村田蓮爾…、大暮維人…などをはじめとする、写実的ではないが圧倒的な画力、今までにない繊細な線を扱う作家の登場により、新しい方向性が示されることになる。写実的に正しいおっぱいではなく、自分の美少女キャラにもっとも適した、なおかつリアリティを損なわないおっぱい表現が先鋭化しはじめる。それまでは水と油のように、混じり合わないもののコップの中に一緒に存在していた「キャラ」と「おっぱい」がついに融合しはじめるのである。体のラインにあったおっぱい、大きさ、たわみ、柔らかさなどをその二次元キャラに一番適した状態へと落とし込んでいく。多くの作家がこの道筋に気づいたのではないだろうか。これは巨乳、貧乳にかぎらず、以降のおっぱい表現全体の流れとなった。

私は、このキャラとおっぱいの融合の大きな立役者は乳首ではないかと思っている。

もちろん、おっぱいの形や大きさはキャラ作りをする上でそのキャラの印象を操作する大きな要素である。例えば大きなおっぱいは、包容力、大人っぽい、おっとり、またはその圧から強気、自信家と言ったような印象がある（図 10、11、12）。一方で、小さなおっぱいは、可憐さ、清楚、純粹さ、中性的、少女性を孕んでいるような印象を受ける（図 13、14、15）。

これだけでも十分キャラの説明には十分ではあるが、おっぱいの印象は乳首の大きさ、形、色、質感によっても変化し、その総体がキャラの印象に結びついていくと考えることはできないだろうか。例えば図 16 のように大きさ、色、形まで情報量が多い乳首だとかなりグロテスクでエロティック、そしてリアルな印象を受ける。おっぱいの大きさは非現実的な大きさだが、リアルな乳首の印象によって、おっぱいも現実味を帯びている。総体としてキャラは、大人っぽくさらにエロティックな作りになっていることがわかる。

逆に図 17 は、図 16 と同じような大きさ、形をしているが乳首の造形は大きさ、色、形のどれも図 16 よりも控えめであることから、おっぱいもフィクションの色が濃くなる。総体としてキャラ自体も大人っぽくはあるが清楚なイメージを持ち合わせている。乳首自体の持つ印象をわかりやすいように表 1 にまとめた。

上記からもわかるように、エロ漫画においてのキャラの性格や印象作りは、おっぱいの、形、

大きさに加えて、乳首の大きさ、色、形の掛け合わせによって決まる。

エロ漫画において乳首はおっぱいの顔であり、最終的なキャラの印象を操作する重要な役割を担っているのである。

表 1

要素	情報量が多い方向	受け取られやすい印象	情報量が少ない方向	受け取られやすい印象
大きさ	大きい	肉体的・官能的・存在感が強い	小さい	可憐・控えめ・象徴的
色	濃い	リアル・生身感・現実寄り	薄い	清楚・理想化・神聖
形(突起)	目立つ／長い	感覚的・能動的・エロティック	目立たない	静的・受動的・彫像的
ディテール総量	多い	現実的・身体として意識される	少ない	抽象的・概念として扱われる
キャラ性への影響	身体が語る 色気・圧・成熟		身体が語らない	無垢・清廉・物語性重視



図 10



図 11



図 12



図 13



図 14



図 15



図 16.



図 17

2-3. 乳首バウンダリー

ここでエロ漫画における乳首表現の考察を一度区切り、次の考察へと移行したい。

乳首を探すために家中の漫画を引っ張り出して読み返していたところ、アニメ『ダーリン・イン・ザ・フランキス』（以下、ダリフラ）のコミカライズ版を見つけた。作画は『To LOVE る・とらぶる-』で知られる矢吹健太朗によるものである。

内容を確認すると、アニメでは詳細に描かれていなかった裸のシーンが、漫画版では明確に描写されていた（図 18）。しかも、アニメでは描かれなかった乳首が明確に描かれていたのである。しかし、見ているとある違和感に気がついた。男性の乳首がないのである。ビーチの場面では、男は半裸にも関わらず乳首がない。風呂場のシーンにおいては、男女ともに裸であるにも関わらず、男の乳首は抹消されているのである。これを「乳首抹消現象」と呼ぶことにする。

この「乳首抹消現象」は本作に限った現象ではない。例えば『らんま 1/2』においても同様の現象が起きている（図 19）。主人公・らんまは水をかぶると女性化し、湯をかぶると男性に戻るという体質を持つが、この変化に伴い、乳首の有無も変化しているのだ。女性形態の時には乳首が描かれる一方、男性形態ではそれが消失するのである。さらに、私の所持する漫画の範囲ではあるが、少女漫画においては男女ともに乳首が描かれない傾向が見られた（図 20、21、22）。一方で、BL 作品においては、登場人物の身体に乳首が明確に描かれている。このように見ていくと、乳首の有無によって、ある種の境界線——いわば「乳首バウンダリー」とでも呼ぶべきもの——が引かれているように思われる。

ではこの乳首バウンダリーは一体、どのような状況で起こるのだろうか。

まず考えられるのは、時代の移り変わりによって性的な部位の表現が避けられるようになり、描かれなくなっていったというものではないだろうか。少年ジャンプでは、1992 年から 1993 年頃にかけて、乳首描写が規制されていったとされている^{*3}。基本的には男女ともに乳首は描かれない傾向にあるが、女性の裸体が描かれる場合には、完全に抹消されるのではなく、湯煙や髪の毛、あるいは記号的なマークによって隠されるケースが多い。このような処理にはさまざまなバリエーションがあり、中にはユーモラス溢れる隠し方も確認できた（図 23）。

また、女性の乳首は描かれなくなっていったが、男性の乳首は描いたままといったような逆転現象が起きるケースもある。ドラゴンボールなどは最たる例である（図 24、25）。漫画

の初期は、ブルマのおっぱいが見えるシーンがあるが、だんだん減ってゆき、最終的には描かれなくなる。(ちなみに「乳首が見えるアニメ・コミック wiki」というサイトではドラゴンボールは、乳首が見えるシーンは、2箇所しか載っていないらしい※4) その代わり、男キャラの乳首は変わらず描かれている。この場合、男の乳首は性的でないとみなされているということがわかる。

次に考えられるのは、ジャンルや読者層によって、乳首の有無やその扱いが分けられているのではないかという点である。例えば、『ダリフラ』や『らんま 1/2』はジャンルとしては少年漫画に分類され、主な読者層も少年・男性であると考えられる。そのため、男性読者にとって魅力的とされる表現が選択されやすい。『ダリフラ』ではSF要素やロボット、戦闘シーンがあり、『らんま 1/2』ではラブコメと格闘が軸になっている。このように、男性向けの構造を持っている作品である。そこへさらに、お色気シーンやいわゆる「ラッキーすけべ」といった要素が加わることで、女性キャラクターの裸が描かれる場面では乳首も描かれることが多くなる。一方で、男性キャラクターの乳首が描かれないのは、男性読者にとってそれが特別な意味を持たず、視覚的な需要が低いためであると考えられる。

少女漫画だと、また乳首がない理由が異なってくるだろう。

少女漫画は主に、感情・恋愛・人間関係を描き、キャラの内面や心理に焦点を当てているのが特徴であり、読者層はもちろん女性が多いとされている※5。そのため、作品の面白さは、登場人物の感情や心理にどれだけ読者が共感できるかに大きく依存していると言える。そのような文脈において、乳首のような具体的な身体描写は、読者の意識を身体へと引き寄せてしまい、結果としてノイズとして機能してしまう可能性がある。あえて男女ともに裸の描写を曖昧にすることで、読者の関心を身体から逸らし、感情や内面表現へと集中させているのではないだろうか。また、恋愛漫画はしばしばファンタジー的な側面を持ち、現実では起こり得ないような関係性（教師と生徒、ヤクザと女子高生、御曹司と庶民など）の中で物語が展開されることも多い。このような設定において、乳首のような具体的で現実的な要素が描かれることで、かえって現実味が強まり、作品の持つ幻想性が損なわれてしまう可能性も考えられる。

このことから、少女漫画において乳首は、現実とフィクションを分ける一種の境界として機能している側面もあると言えるだろう。

言い換えれば、男性向け作品では乳首を描くことで幻想が強化されるのに対し、少女漫画では乳首を描かないことによって幻想が維持されている、と捉えることができる。

では、逆に「乳首が描かれても許容される条件」について考えてみる。

やはり大きなポイントは「エロ（性的要素）に結びつかないこと」にあるのではないだろうか。たとえば、教育や育児をテーマにした漫画、戦争などの現実を描くノンフィクション作品、あるいは徹底的にギャグへと振り切った作品などが、この条件に当てはまると考えられる。これらの作品では、乳首の描写があくまで文脈上自然なものであったり、笑いの一部として機能していたりするため、性的な意味合いを帯びにくい。それぞれの具体例を見ながら、実際にどのような形で乳首が描かれているのかを検討していこう。

『ベビーシッター・ギン！』

『ベビーシッター・ギン！』は、英国風淑女の衣装を身に纏う男性ベビーシッターが、家庭に巻き起こる様々な子育てに関することや家庭内の問題を解決していく姿を描いた漫画である^{※6}。

少女漫画の分類であるため基本的には乳首は描かれていないが、ブラジャー形哺乳瓶（図26）というものが登場する回がある。奥さんに育児を任せっきりなばかりか、自身の世話までやらせていた旦那さんが、奥さんの入院をきっかけに、ギンさんと出会い子育てを始めるという回である。ブラジャー形哺乳瓶は、この回に登場する赤ちゃんが母乳からしかミルクを飲まないという習慣があり、それに合わせるためにギンさんが持ってきた特性哺乳瓶なのである。見た目は乳房を模した形状をしており、視覚的には「おっぱい」を強く想起させるが、あくまで哺乳瓶としての機能を持つ育児用具である。また、そこに付属する乳首部分も、赤ちゃんが授乳するためのものとして明確に位置づけられている。このように、本エピソードにおける乳首の描写は、「授乳」という明確な機能に基づいており、性的な意味合いとは切り離されている。そのため、視覚的に乳房や乳首を想起させる要素が含まれていたとしても、それがエロティックな表現へと結びつくことはないと言える。

『はだしのゲン』

戦争漫画において重要なのは歴史的な事実を体験として残す役割を持つこと、そして同時に、戦争を知らない世代に対して、当時の現実がどのようなものであったのかを、どこまでリアリティをもって表現できるかという点が挙げられる。そうだとするならば、当時の人々の生活や身体的な状況を含めて描写しないことのほうが、かえって不自然であると言

えるだろう。人間の生のあり方をありのままに描く以上、乳首の描写もまた、その延長線上に位置づけられるものである。たとえば図 27 では、母乳が出ずに困っている母親に代わって、見知らぬ女性が赤ん坊に授乳を行う場面が描かれている。このシーンにおける乳首の描写は、生命維持という切実な文脈に根ざしている。また図 28 では、ゲンの姉が半裸の状態で身体検査を受けさせられる場面が描かれている。ここでの描写は、戦時下における個人の尊厳の侵害や、人権が軽視される現実を強く印象づけるものである。

このように、両者に共通しているのは、乳首の描写がいずれも戦争の実情を伝えるための必然的な事実として機能している点である。そこには性的な意味合いは介在せず、むしろ当時の現実や人間の生をありのままに伝えるための表現として位置づけられていると言える。

『山田タコ丸くん』

山田タコ丸くんは、下品でちょっと可哀想な 4 コマ漫画である。

図 29、30 はその中の 2 話である。確かに乳首は描かれているが、笑いの起点となる機能を持ち合わせている。つまりこの乳首は笑いのための乳首であり、エロさを感じるための乳首でないことがわかる。

ここまで乳首バウンダリーはどのような状況下で起こり得るのか考察をした。結果として、乳首バウンダリーは、その作品がどこに読者の視線を導きたいのかを示す境界線として機能していることが見えてきた。

エロ漫画や男性向け作品では、乳首は欲望を許可する記号として描かれ、主に女性の身体に付与される。一方で、少女漫画では乳首は感情や関係性を表現する際にノイズとなって現れるため徹底して排除される。ここでの乳首は、現実感を持ち込みすぎてしまう危険な存在となっている。

また、育児漫画や戦争漫画、ギャグ漫画において乳首が描かれてもエロく見えないのは、それが「快楽」ではなく「機能」「事実」「笑い」に回収されているからである。

乳首は、現実とフィクション、身体と感情、欲望と理解のあいだに引かれる、極めて繊細な境界線なのではないだろうか。



図 18



図 19



図 20



図 21

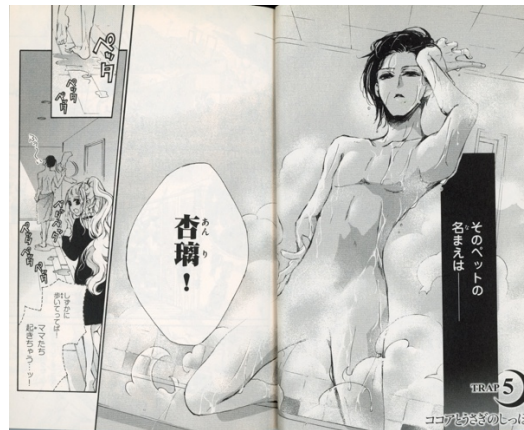


図 22



図 23



図 24



図 25



図 26



図 27



図 28

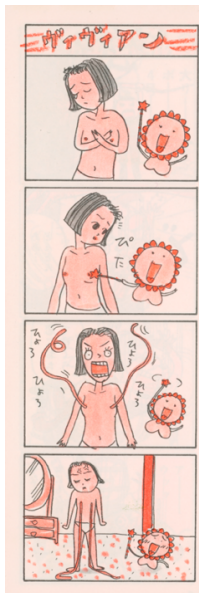


図 29

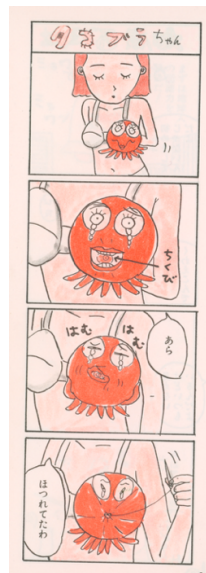


図 30

3. 乳首の面的表現

本章では西洋絵画の乳首の描かれ方と、日本の浮世絵の乳首の描かれ方の違いを見ていこうと思う。

3-1. 西洋絵画における乳首表現

西洋絵画では昔からヌードがたくさん描かれてきた。西洋はヌードのスペシャリストである。

ヌードのルーツを辿ってみると、ルネサンス期（15～16世紀）にあることがわかった^{※7}。14世紀イタリアの経済発展により商人などの、富裕層が芸術を支援し、文化活動が盛んになっていく中で、人文主義（神を讃えるだけではなく、自分たち人間そのものをもっと讃えよう、という考え）というのが広まる。この流れは、美術の世界にも反映されるようになった。ルネサンス美術では古代ギリシャの人体表現を理想とし、解剖学の進歩によって写実的な裸体表現を志向するようになる。しかし、キリスト教では人間の裸体が禁じられていたため、画家たちは神話の女神や精霊といった「人ならざる存在」を題材にすることで裸体表現を可能にし、表現の自由を拡大させていった^{※8}

美術史家で神戸大学大学院人文学研究科教授の宮下規久朗は、そんなルネサンス期に出てきたヌードの意味を女性のヌードに限ってではあるが、エロスの表現として描かれてきたといっている^{※9}。男性が見て楽しむためのエロティックなヌード像であるらしい。

この当時はあくまで理想的なヌードというのを追求している時代であったため、乳首の描かれ方は大体、どれも似たりよったりのものが多い（図 31、32、33）。薄ピンクで、乳輪はなく丸ポチのボタンみたいな乳首である。正直、20世紀前後まではほぼ、どの乳首も同じである。

細かく見れば徐々に変化はしている（乳輪部分も描かれるようになって、逆に乳首の部分は乳輪と中和するような感じになっていくようなものも見受けられる（図 34、35））が、大半は薄ピンクでちょこんと可愛らしく存在しているものが多い。

ということは、これらの乳首表現は当時の男性または世間から見た理想的な乳首であることがわかる。

さて、ここで1つ面白い作品を見てみよう。「乳首 西洋絵画」と検索すればすぐヒットする不思議な絵画作品である（図 36）。似たような顔つきの二人の女性が上半身だけ裸の状

態でこちらを見ている。左の女性は右の女性の乳首をつまんでいて、右の女性は自身の左手で指輪をこちらに見せるように持っている。この二人は姉妹とされていて、右の女性が姉の「ガブリエル・デストレ」らしい。二人がいるのは浴槽で浴槽には白い布がかけられている。周りには赤いカーテンのような幕がついており、奥では侍女が針仕事をしている^{※10}。

この絵の概要をもう少し詳しく調べたところ、乳首をつまんでいるのは懷妊や妊娠を示唆している、または、子どもを多く産むことができる女性であることを示唆しているとする見解がある^{※11}。実際、この女性は4人子供を産んでいることがわかっている。指輪は王様との婚約の意、またはアンリ4世の寵愛を示していたのではないかという解釈もある。

美術史の中では乳房は母性や神秘、快楽の象徴とされてきた^{※12}ことを踏まえれば確かに、赤子の授乳のための乳首を摘むことで、妊娠を示唆するというのはわからないこともない。ただ、私が確認した範囲では他の絵画で乳首を用いて妊娠を示唆しているのがあまり見つからない。そのため、乳首だけで妊娠、懷妊の象徴というには少々難しいのではないだろうか。それよりも、乳首を摘まむ仕草から性行為を想起させ、ハニートラップのように姉妹二人が王様に結婚を迫っている図の方が個人的になんとなくしっくりきてしまうものである（言うのを忘れていたが、ガブリエルはアンリ4世の愛人だったらしい）。だがそれにしては、絵画の質感が均一的で、情緒がなくエロティシズムはそこまで感じないとは思わないだろうか。

実はこの絵画と似た絵画がいくつかある（図37、38、39）。

これらの絵画は全て、フォンテーヌブロー派という画家のグループによって制作された。フォンテーヌブロー派はマニエリスム（マニエリスムは、ルネサンス期のミケランジェロらの技巧を模倣・発展させ、人工的な美しさを目指した時代である。）の影響を強く受けている。

そういった背景からもこの図36の絵画も何度も模倣され繰り返し描かれてきたことがわかる。私はこの模倣という行為が、絵画の中のエロスや、感情表現を抑える力があるのではないかなと思っている。何度も描くことで、感情的な揺れは抑えられ、より機械的な無機質的な様相に変わっていく。まるで生を無視して描いていくかのようである。

図36の絵画が官能的に見えずどこか奇妙に見えるのは、そうした背景があるからではないだろうか。乳首も何度も描くことで、エロスと言う側面が抑えられるのかもしれない。



图 31



图 32



图 33



图 34



图 35



図 36



図 37



図 38



図 39

3-2. 日本の浮世絵における乳首表現

では日本の浮世絵ではどのように乳首が表現されてきたのだろうか。

浮世絵は江戸時代から描かれ始めた風俗画である。当時の庶民の人々の娯楽として楽しまれた^{※13}。つまり、当時の人々の暮らしぶりや文化が多少の脚色はあれど、等身大で描かれていたということになる。『乳房の文化論』（2014）で、上野千鶴子は、当時の人々にとって女性が上半身裸になるのは日常的なことであり、また裸体であるということ自体の文化的表象的価値は当時、すこぶるひくかったといっている^{※14}。確かに、春画（図 40、41）を見ると焦点が当たっているのは性器の方で、陰毛や性器の描写は細かく描かれているのに対し、おっぱいは描かれてはいるけれど乳首の描写はほとんど線である。当時の民衆の部位

それぞれの興味の有無によって、それ自体の描写力にも差が出てくるというのは西洋絵画と異なっていて面白い。西洋絵画はどちらかというと理想化を追い求めるあまり、均一化されていたように見える。

さて、『乳房の文化論』を読み進めていくと、興味深い浮世絵を発見した。

山姥と金太郎という浮世絵である(図 42)。画面左に金太郎、右に山姥が描かれているが、一般に想像される「山姥」のイメージに比べると、その姿はむしろ若く美しい女性として表現されている。この主題は、喜多川歌麿が繰り返し描いた題材としても知られている^{*15}。

注目してほしいのは右下に描かれた細部である。なんとつままれているのである、乳首が。西洋絵画における事例だけでなく、日本の浮世絵においても同様のモチーフが存在する点は非常に興味深い。しかし、この作品と先に見た「ガブリエル・デストレ (以下略)」のあいだには、いくつかの重要な差異が認められる。第一に、乳首をつまむ主体が成人女性ではなく子供であるという点。第二に、その描写が象徴的・寓意的というよりも、むしろ日常の一場面を切り取ったかのように表現されている点である。上述の上野 (2014) によれば、この場面における山姥は陶然とした表情を浮かべており、ある種の快楽を感じていると解釈されている。とすると、ここでの乳首は快楽のための乳首ということになる。私としては、子供がご飯中に暇で手持ち無沙汰だから乳首をつまんでいて、母親は子供が乳を飲んでいるのを嬉しそうにみているようにしか見えないのだが。

以上を踏まえると、ガブリエル・デストレの絵画における乳首が象徴的・記号的な意味(婚姻・妊娠・性的誘惑)を担う要素として機能していたのに対し、この浮世絵における乳首は、身体的接触や感覚を通じてエロスが立ち上がる契機(いわば「エロスの起点」として機能していると整理することができるだろう。



図 40



図 41



図 42

4. 乳首の立体的表現

本章では立体表現における乳首の描かれ方を考察していく。

4-1. タイの乳首表現

一月にタイを訪れる機会があり、現地で乳首表現の収集も幸運にも行うことができた。タイは仏教文化が色濃く根付く国であるため、主に寺院や王宮を中心に見学を行ったが、その過程で多くの造形や装飾の中に乳房・乳首の表現を確認することができた。

図 43 はタイの寺院ワット・ポーにある仏像群である。見た目的に男性の仏像だったが、乳首が描かれている。突起部分だったので金が剥げて茶色くなっていた。興味深いのは、並んでいるほとんどの仏像に乳首が施されているところである。

図 44 は同じ寺院の中の目玉大仏である超巨大な涅槃仏なのだが、これにもしっかり乳首を確認することができた。

図 45 は同寺院の庭にあった、ヨガポーズをしている像である。こちらにもうっすらとではあるが乳首が確認できた。

図 46 はタイの伝統仮面劇「コーン」に関する展示館で撮ったものである。これまでにみたことない程巨大な乳首である。しかもこれは乳輪部分も乳頭とは別に表現されている。ワットポーの涅槃仏の乳首が一番巨大かと思ったが、完成度で言えばこちらの乳首の方が優れていると言えるだろう。

図 47 は同様の展示館の入り口にあったものである。

これはガルダに跨ったビシュヌ神の像らしい。ガルダは仏教、ヒンドゥー教に登場する聖獣である^{*16・17}。これ自体に乳首ははっきりと確認できなかったのだが、ガルダの体に描かれていた渦巻き模様が乳首の存在を暗示しているようで興味深い。この渦巻きはおそらく、毛を表現しているものと思われる。

図 48 は同展示館の中にあった伝統仮面劇に使用する大道具の装飾の像である。

これは、胸の膨らみからしても女性だろう。寺院の壁画にもこの像と同様の装飾を施した人物が描かれている点であるが、壁画では胸部が装飾によって覆われ、乳首が描かれていない場合が多かった。それに対して立体像になると、同じく装飾があるにもかかわらず、身体の細部まで丁寧に表現され、乳首もしっかり再現されている点は非常に面白い。

図 49 も大道具の一つである。これは、毛もあって乳首もさらについている。図 48 と同様に動物がモチーフだが、こちらには乳首が描かれている。

このような感じで、絵画も含めるとタイにはここで取り上げきれないほどの乳首を発見することができた。なぜここまで乳首が多いのか調べてみると、面白いことがわかった。インドを含む東南アジアの宗教美術においては、多くの女性像が豊満な乳房や腹部、太ももを伴って造形されており、これらの身体的特徴は、豊穰や生命力、大地の生成力を象徴するものと考えられる^{*18}。さらに、仏教やヒンドゥー教の文脈においては、裸体表現は必ずしも性的な意味を帯びるものではなく、むしろ禁欲や精神原理の体現を象徴するものとして理解されている^{*19}。

したがって、タイにおける宗教的・美術的文脈の中では、身体の表現は必ずしもエロティシズムと結びつくものではないことがわかる。乳首の表現についても、それ自体が特別な意味を強く帯びるというよりは、身体を構成する一要素としてごく自然に造形されているにすぎない。言い換えれば、タイの宗教美術において乳首を表現することは、強調や逸脱ではなく、むしろ極めて自明で日常的な身体表現の一部であるのだろう。



图 43 全体

图 43 扩大



图 44



图 45



图 46



图 47



图 48



图 49

4-2. 日本の乳首表現

タイの仏像などの乳首を調べているうちに、日本の仏像はどうだったんだろうかと思い資料を収集したがあまり見つからず（リサーチ不足という部分もあるが）日本の仏像には基本的に乳首が存在しないことが見受けられる。それでもいくつかは見つけられたものを見ていこうと思う。

金剛力士像（図 50）

金剛力士像の乳首について調べると、なんと仏像の中で乳首の表現が施されるのは仁王像のみらしい^{*20}。その表現は、普通の乳首の形態と花乳首という形態のものがあるらしい。

なぜこのような形状をしているかは定かではないらしく、奈良仏師の折上稔史氏は、これは乳首ではなく甲冑を着るため乳首を保護する「おっぱいガード」（註：命名折上）ではないかと考察している^{*21}。それから乳首の位置についても、鎌倉期以降は少し上めに配置することで、女性の乳首のように表現するのが主流となったらしい^{*20}。

妙音弁財天像（図 51）

弁財天は、サンスクリット語でサラスヴァティーと言いヒンドゥー教の神様の名前らしく、古代インドでは「河の女神」として信仰されてきたらしい。そのため水に関わる場所に祭られることが多いそう^{*22}。江ノ島神社の妙音弁財天像は服を纏っていないことから「裸弁天」とも呼ばれているらしい。大仏辞典の図解では、この裸弁天の説明をする中でルーツとなる河の神サラスヴァティーを彷彿とさせる姿をしていると述べている^{*23}。乳首の表現としては仁王像のように独特なものではなく、むしろタイの仏像などに見られる形状に酷似している。

兜跋毘沙門天の甲冑（図 52）

乳首ではないのだが、毘沙門天が着用している甲冑がとても興味深い。

胸甲部分には左右対称に丸い円が施され、その内部には顔のような模様が描かれている。この模様は、鬼や獅子をモチーフとした鬼面と呼ばれるもので、魔除けの装飾とされている。毘沙門天も弁財天と同様、インド周辺から日本に伝わった神である。タイの乳首表現でも触れたが、インドや東南アジアの文脈では乳房やへそのあたりが生命力の象徴とされることが多い。とするとその象徴部位を魔除けの意匠で守るという発想は、極めて自然な発想

だろう。



図 50



図 50 拡大



図 51



図 52

4-3. 埴輪の乳首表現

ここまで、タイと、日本それぞれの立体表現における乳首を見てきた。ではさらに昔の時代の乳首はどのように描かれているのだろうか。『乳房の文化論』の中の「古墳時代と乳房」

※²⁴ というチャプターを元に古墳時代の埴輪における乳首表現を見ていこう。

まず、埴輪は古墳時代に登場した日本特有の器物で、死者の世界である墓を飾り立てるための道具である。調べていくと女性の埴輪の乳房は西と東で表現が異なるということがわかった。乳房がある埴輪は主に東の方で盛んに作られていたという（図 53、54、55）。一方で、西ではほとんど乳房の表現はされないらしい（図 56、57）。では東の埴輪がたいそうな乳房であるかと言われればそうでもない。乳房が描かれていたとしても、小さくなく、ほぼ乳首と一体化したような乳房表現が多い。服装なども簡略化している部分が多く、残念ながら乳首は簡略化に巻き込まれて表現されていない。こうした埴輪の消極的な乳房表現から見るに、乳房自体女性らしさを表す上でそこまで重要視されていなかったことがわかる。

一方で、乳房の文化論で古墳文化と乳房について論じていた塚田良道氏は、女性の乳房が表現されにくかった理由としてこのような推察をしている。「おそらく動乱の時代に女性の肉体を強調することは女性の身の危険を高めたのであり、このため乳房を強調することは憚られたのではあるまいか。それが社会の安定によって乳房の強調へと表現が移っていったのだとすれば、適切な比較ではないかもしれないが、日本の戦前戦後における女性ファッションの変化とも共通する現象とも言えるかもしれない。」

また一方で、埴輪は古墳に立てられ、遠くから眺めるものだから、細かい表現が省かれたという考えも本文の中で語られている。私はこの説を推したい。遠くから見てもあるのかわからない乳首（乳房）は真っ先に切り捨てられるだろう。

これらのことから非常に残念ではあるが埴輪には主だった乳首表現が見られないことがわかった。



図 53

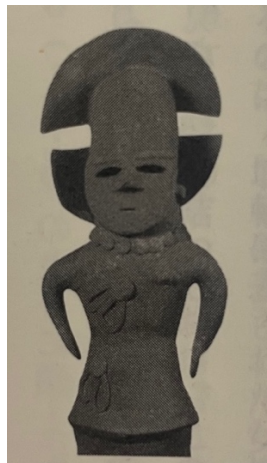


図 54.



図 55



図 56



図 57

5. 結論

本論文では、線・面・立体という三つの領域を横断しながら、乳首表現が単なる身体描写ではなく、時代・文化・ジャンル・物語の志向性によって意味づけられる「境界装置」であることを明らかにした。日本の漫画史において乳首は、70～80年代の写實的・デフォルメ的表現を経て、90年代以降にはキャラクター性と融合し、身体の一部でありながら性格や物語性を操作する記号として機能するようになった。一方で、少年漫画・少女漫画・BL・エロ漫画の差異からは、乳首が描かれるか否かが性的かどうかではなく、読者の視線をどこに導くかによって決定されることが示された。西洋絵画では乳首は理想化されたエロスの一部として均質に描かれ、象徴化が進む一方、日本の浮世絵では日常性の中で機能的・部分的に扱われ、エロスの焦点は性器に置かれていた。さらに立体表現においては、タイ仏教美術では乳首が生命力や豊穡の象徴として自然に存在するのに対し、日本では宗教観や制作事情により省略・変形される傾向が見られた。これらの比較から、乳首とは現実とフィクション、欲望と物語、身体と意味のあいだに引かれる極めて繊細な境界線であると結論づけられる。

註

1. 佐伯由香, 細谷安彦, 高橋研一, 桑木共之[編訳]『トートラ人体解剖生理学 原書9版』丸善、2014、627頁。
2. 稀見理都、『エロマンガ表現史』、太田出版、2017。
3. ヤマカム「教科書に載らないジャンプの乳首漫画の歴史！」
<https://yamakamu.net/jumpchikubi/2>
4. 乳首が見えるアニメ・コミック wiki『ドラゴンボール』
<http://chikubiwiki.wiki.fc2.com/wiki/乳首が見えるアニメ%2Fた行%2Fと%2Fドラゴンボール>
5. マンガディフィニションズ「漫画ジャンルの基準とは？少年少女青年漫画の定義と歴史を解説」
<https://mangadefinitions.com/2025/06/14/%e6%bc%ab%e7%94%bb%e3%82%b8%e3%83%a3%e3%83%b3%e3%83%ab%e3%81%ae%e5%9f%ba%e6%ba%96%e3%81%a8>

<https://www.riken.ac.jp/press/2025/06/14/01>
<https://www.riken.ac.jp/press/2025/06/14/01>

(2025 年 6 月 14 日確認)

6. ウィキペディア『ベビーシッター・ギン!』<https://ja.wikipedia.org/wiki/ベビーシッター・ギン!>

7. セピアのゼロから歴史塾「15 分でもわかる【ルネサンス】開花した時代背景とレオナルド、ミケランジェロ、ラファエロなど巨匠の作品・功績をスピード解説!【受験生も必見】(Renaissance)」

https://youtu.be/NytUFW4DnpI?si=dHBEbPySXtjQ0V_w (2022 年確認)

8. まつもとなおや「美術史における裸婦表現の変遷」

<https://note.com/virginie31/n/n7658f54b95e2>

(2025 年 4 月 15 日確認)

9. 公益社団法人国民會館『第 1130 回武藤記念講座：ヌード芸術の東西』（講演者：美術史家 神戸大学大学院人文学研究科教授 宮下規久朗氏）

https://www.kokuminkaikan.jp/chair/lecture/KB3QqpI2#index_wgKDXV6y

(2025 年 2 月 22 日確認)

10. 山田五郎オトナの教養講座「なんでチ○ビつまんでるの？実はあの大天才とも関係！？【フォンテーヌブロー派】」（Youtube 動画）

https://youtu.be/uIp6Gt_SaOk?si=c75QzYupTWPXDqfm

11. ウィキペディア『ガブリエル・デストレとその妹』

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AC%E3%83%96%E3%83%AA%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%87%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%AC%E3%81%A8%E3%81%9D%E3%81%AE%E5%A6%B9> (2026 年 1 月 28 日閲覧)

12. arsvi.com 生存学研究所『事項索引 index：乳房|breast』

https://www.arsvi.com/d/b07.htm?utm_source=chatgpt.com

13. 名古屋刀剣博物「浮世絵とは 種類と歴史」<https://www.meihaku.jp/ukiyoebasic/ukiyoebasic/> (2026 年 1 月 29 日閲覧)

14. 上野千鶴子「感じる乳房—誰のものか?」『乳房の文化論』淡交社、2014、5 頁。

15. 文化遺産オンライン「山姥と金太郎・栗枝持」解説

<https://online.bunka.go.jp/heritages/detail/476700> (2026 年 1 月 29 日閲覧)

16. HIS「ガルーダ・インドネシア航空」
https://www.his-j.com/kaigai/air/airline/garuda_indonesia/#:~:text=ガルーダ・インドネシア航空インドネシア共和国,役割を担っている%E3%80%82
17. ウィキペディア「タイの国章」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/タイの国章> (2026年3月30日閲覧)
18. 肥塚隆「古代インド美術の乳房表現」『乳房の文化論』淡交社、2014、132頁。
19. ウィキペディア「裸」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/裸> (2026年1月29日閲覧)
20. 竹中友一「仏像の意外な話「仁王像のみ乳首を表現するのはなぜ？」奈良仏師の疑問にさまざまな声」まいどなニュース <https://maidonanews.jp/article/14975945>
(2023年8月23日確認)
21. 折上稔史「ご存知ですか？仁王さまのおっぱいガード」『奈良 大阪 仏像 彫刻教室 仏像彫刻折上』 <https://narabussi.blog.fc2.com/blog-entry-105.html> (2022年4月18日確認)
22. 村松哲文、長谷法寿『超図解大仏大辞典 疑問が全て解ける』朝日新聞出版、2025、176頁
23. 同上、178頁
24. 塚田良通「古墳文化と乳房」『乳房の文化論』淡交社、2014

図版

- 図1 小池一夫/叶精作、1981『魔物語・愛しのベティ』、小学館
- 図2 小池一夫/叶精作、1979『実験人形ダミー・オスカー』3巻、スタジオシップ
- 図3 みさき栄一、1979『未知との挿入』 G&G ギャンブル&ガールズ昭和54年1月号、出版社不明
- 図4 上村純子、1987、『いけないルナ先生』1巻、講談社
- 図5 みやすのんき、1985、『やるっきや騎士』1巻、講談社
- 図6 よしかわ進、1980、『おじゃまユーレイくん』2巻、小学館
- 図7 吾妻ひでお、1974、『ふたりと5人』1巻、秋田書店
- 図8 北御牧慶、1988、『アフロディーテの憂鬱』、白夜書房
- 図9 にしまきとおる、1993、『D-cup LOVERS』、ヒット出版社
- 図1～9、図16、17 稀見理都、2017、『エロマンガ表現史』太田出版より抜粋

- 図 10 ONE PIECE 公式サイトより <https://one-piece.com/character/nami/index.html>
- 図 11 【ルパン三世】全オープニング&エンディング&アイキャッチ大公開！【TV アニメ化 50 周年】 | "LUPIN THE 3RD" FULL OPENING & ENDING & EYECATCH
<https://youtu.be/w9sh-kTTaNM?si=QrnGD2tl51nL3epB>
- 図 12 鬼滅の刃ヒノカミ血風譚公式サイトより
<https://game.kimetsu.com/hinokami2/character/?chara=32>
- 図 13 ナルティメットストームコネクションズ公式サイトより
<https://naruto-game-sc.bn-ent.net/character/#charaDetail-36>
- 図 14 銀魂公式サイトより <https://www.bn-pictures.co.jp/gintama/character/>
- 図 15 進撃の巨人公式サイトより <https://shingeki.tv/season1/character/#1>
- 図 16 みやびつづる、2001、『イノセント・チルドレン』、司書房
- 図 17 琴吹かづき、1994、『NIGHT VISITOR』、司書房
- 図 18 矢吹健太朗/Code:000、2018、『ダーリン・イン・ザ・フランキス』1 巻、集英社
- 図 19 高橋瑠美子、1987『らんま 1/2』、週刊少年サンデー
- 図 20 宮城理子、2006、『メイちゃんの執事』1 巻、集英社
- 図 21 築島治、2014、『私たちには壁がある。』、講談社
- 図 22 鳥海ペドロ、2016、『黒豹と 16 歳』、講談社
- 図 23 真倉翔/岡野剛、2006、『地獄先生ぬ〜べー』、集英社
- 図 24、25 鳥山明、1985、『DRAGON BALL』、集英社
- 図 26 大和和紀、1998、『ベビーシッター・ギン!』、KADOKAWA
- 図 27、28 中沢啓治、1977、『はだしのゲン』、集英社
- 図 29、30 朝倉世界一、1990、『山田タコ丸くん』、双葉社
- 図31ピエロ・ディ・コジモ、1480「シモネッタ・ヴェスプッチの肖像」、コンデ美術館、シ
ヤンティイ
- 図 32 サンドロ・ボッティチェリ、1483 年頃『ヴィーナスの誕生』、ウフィツィ美術館、フ
イレンツェ
- 図 33 ティツィアーノ・ヴェチェッリオ、1514、『聖愛と俗愛』、ボルゲーゼ美術館、ローマ
- 図 34 ジャン・オーギュスト・ドミニク・アングル、1862、『トルコ風呂』、ルーブル美術館、
パリ
- 図 35 ピエール＝オーギュスト・ルノワール、1884 年 - 1887 年、『大水浴図』、フィラデル

フィア美術館、フィラデルフィア

図 36 フォンティーヌブロー派、1594 年頃、『ガブリエル・デストレとその妹』、ルーブル美術館、パリ

図 37 フランソワ・クルーエ、1571 年頃『浴室の貴婦人』、ワシントンナショナルギャラリー

図 38 作者不明、コンデ美術館、シャンティイ

図 39 作者不明、所蔵場所不明。（おそらくフォンティーヌブロー派のものと思われる）

図 40 喜多川歌麿、『逸題戯画組物』（上野千鶴子 「感じる乳房—誰のものか？」『乳房の文化論』淡交社 2014

図 41 わずかな布きれをつけた春画（上野千鶴子 「感じる乳房—誰のものか？」『乳房の文化論』淡交社 2014

図 42 喜多川歌麿、『山姥と金太郎』

図 43 拡大筆者撮影

図 43 全体バンコクナビより、<https://www.bangkoknavi.com/miru/41/>

図 44～49 筆者撮影

図 50、50 拡大 野崎順次、JAPAN-GEOGRAPHIC.TV、MONTHLY WEB MAGAZINE July 2012 より <https://japan-geographic.tv/news/0094-nozaki.html>

図 51 広報ふじさわ 2019 年 5 月 25 日号より
https://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/kouhou/sumafo/khf-s190525/sisei22_s.html

図 52 東大寺公式サイトより、<https://toji.or.jp/guide/houmotsukan/>

図 53 茨城県太平古墳群の乳飲み子を抱く女性埴輪（ひたちなか市教育委員会）

図 54 埼玉県酒巻 14 号墳の女性埴輪（行田市郷土博物館）

図 55 福島県天王壇古墳の女性埴輪（本宮市歴史民俗資料館）

図 56 福岡県小生西古墳の女性埴輪（飯塚市教育委員会）

図 57 大阪府蕃上山古墳の女性埴輪（大阪府立近つ飛鳥博物館）

図 53-57 は塚田良通「古墳文化と乳房」『乳房の文化論』淡交社 2014 より抜粋。